

〔野菜〕

1. 概況

平成 24 年、年明けから 2 月は気温の低い状況が続いた。特に、九州北部の 2 月の平均気温は平年に比べて 1.4℃も低かった。沖縄でも 1 月・2 月の日照時間は例年の 5～6 割程度ときわめて短かった。一転して、4 月・5 月の九州北部は平年を 0.5～0.6℃上回り、また、5 月の降水量は 32%と極端に少なかった。7 月中旬には「平成 24 年 7 月九州北部豪雨」が発生し、夏秋野菜の産地における野菜圃場やパイプハウス施設、その他インフラにも甚大な被害が生じた。8 月の九州北部の気温は高く、九州南部や沖縄では降水量が例年の 1.6～2.1 倍と多かった。秋の訪れは九州沖縄全体で早く、冬の寒さは例年になく厳しかった。11 月・12 月の九州北部・南部の平均気温は 0.9～1.5℃、10 月・11 月の沖縄でも 0.8℃、それぞれ低く、露地、施設を問わず野菜の生育遅延が認められた。沖縄への台風の接近は 12 個と多く、第 15 号、16 号、17 号は 3 個連続して非常に強い勢力を保ったまま沖縄本島周辺を通過し、パイプハウスや露地野菜が被害を受けた。野菜ごとの概況を以下に記す。

2. 果菜類

1) イチゴ

品種動向：促成栽培において、福岡は「あまおう」、佐賀・大分・宮崎は「さがほのか」、熊本は「さがほのか」、「紅ほっぺ」および「ひのしずく」、鹿児島は「さがほのか」と「さつまおとめ」、長崎と沖縄は「さちのか」が、それぞれの主要品種である。熊本で「紅ほっぺ」の作付けがやや増加傾向である。宮崎における四季成り品種は「みやざきなつはるか」。各県ともに新品種に対する期待は大きく、育種を急いでいる。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）：[平成 23 年定植] 1・2 月の低温で生育が遅延し、果実の肥大も不足気味であった。3 月以降は天候の回復がみられたが、収量は平年並み以下となった県が多かった。単価は確保された。炭疽病、うどんこ病の発生はやや多かった。佐賀では CO₂ 施用を実施するとともに、パッケージセンターを活用。[平成 24 年度産]育苗期の高温のため、やや炭疽病発生が多かった。定植後から年末にかけての低温と乾燥のため、生育は 1～2 週間遅れ、成熟にも日数を要し、年内収量は大きく平年を下回った。単価は高かった。炭疽病以外に、萎黄病、うどんこ病が、虫害ではハダニ、アブラムシ、アザミウマが発生した。なお、鹿児島では 9%近く作付面積が減少した。

四季成り／普通栽培（宮崎）：初期の花芽分化が安定せず、収穫始期がやや遅れ、年間収量も昨年の平均 2t/10a に達しなかった。一戸で炭疽病が多発した。

2) トマト

品種動向：産地により、品種は多様であるものの、大きな動きは見られない。また、葉かび病抵抗性品種の導入が増加している。「麗容」、「CF 桃太郎はるか」、「りんか 409」、「感激 73」、「マイロック」等が、促成および抑制裁培用の主要品種。夏秋栽培用としては、「りんか 409」、「みそら 64」。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）：[23 年定植]台風の被害もなく、初期生育はほぼ順調。1・2 月の低温・寡日照のため生育がやや抑制され、小玉化や着色の遅れが見られた。しかし、通期としてはほぼ平年並みの作柄であった。トマトの機能性報道の影響で近年にない高値となり、販売金額は大きく伸びた。[24 年定植]定植後の天候に恵まれて活着良好であった。11 月からの低温により、やや出荷量の伸び悩みもあったが、年内の収量は平年並みの模様。沖縄では台風被害もほとんど無く、例年にない豊作が予想されている。

普通栽培（熊本、大分、宮崎）：熊本・大分では 7 月の豪雨による施設等への直接の被害により、生産は大きく減少した。また、宮崎では曇天・長雨による落花が多く、ハウス内過湿による水疱症、一部で疫病、斑点病の発生がみられた。

病虫害では、各地の促成栽培において灰色かび病の被害が認められた。黄化葉巻病（コナジラミ）対策として、0.4mm 目合いの防虫ネット被覆、UV カットフィルムの導入、また、発病株の抜き取り等がなされ、ほぼ落ち着いた推移となっている。その他の病虫害として、促成栽培では、褐色根腐病、疫病およびタバココナジラミが、また早熟・普通栽培では、すすかび病、青枯病、かいよう病が発生した。

3)ナス

品種動向:促成栽培用の主要品種は「筑陽」。鹿児島において単為結果性の「あのみりのり」の割合が増加傾向。なお、「あのみりのり」は果形が異なるため、出荷基準を変更した。佐賀では単為結果性の「佐賀 N1号」の試験栽培が進められている。早熟・普通栽培用としては、熊本で、「筑陽」、「ヒゴムラサキ」、「黒紫大長」等。

促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、沖縄):[23年定植]初期生育はほぼ順調。しかし、1・2月の低温・寡日照のため生育が抑制され、収量は減少した。春以降の収量は平年並みに回復した。全体に、販売単価は高く推移した。[24年定植]初期生育はほぼ順調であったが、11月からの低温により、主枝の生育が遅れ、年内の収量は例年に比べ下回った。沖縄ではほぼ順調に推移している。省エネのため、福岡では二酸化炭素施用と株元ダクト加温がそれぞれ10%程度普及した。アザミウマ類の発生がみられ、熊本、鹿児島ほかではスワルスキーカブリダニ等の天敵の利用によるIPM取り組みが進められている。

早熟・普通栽培(熊本):定植時期の天候に恵まれ、生育は順調であったが、7月の豪雨、寡日照のため、生育後半は草勢が低下し、収量は少なかった。青枯病、すすかび病およびアザミウマ類が発生。

4)ピーマン

品種動向:促成栽培の主要品種は、宮崎では「京鈴」、「みやざきグリーン」、「京ゆたか」、鹿児島では「TM 鈴波」、「京鈴」、「オールマイティ」、沖縄では「ちぐさ」、「オールマイティ」。早熟・普通作型では「さらら」が熊本と大分で、「京ひかり」と「みおぎ」が熊本で、「京ゆたか」と「京まつり」が宮崎で栽培された。沖縄の抑制栽培では「ちぐさ」、「オールマイティ」。品種に大きな動きはない。なお、宮崎では、宮崎県育成の複合病害抵抗性台木が約60haで導入されている。

促成栽培(宮崎、鹿児島、沖縄):[23年定植]鹿児島の1・2月の出荷量は平年並みであったが、2・3月の天候不順の影響で3・4月は平年より収量はやや少なかった。5月は持ち直し、単価も高かった。青枯病やコガネムシの被害有り。アザミウマ、コナジラミ対策として、スワルスキーカブリダニの利用が増加した。燃油高騰対策として、ヒートポンプの対策が大隅半島で拡大している。[24年定植]宮崎では、定植後の生育・着果が良好であったことから、着果過多及び10月中旬からの冷え込みで草勢低下がみられた。晴天に恵まれたが、低温傾向で果実肥大が遅れている。また、暖房機の稼働時間も長い。アザミウマの発生が増加していることから、スワルスキーカブリダニの利用が増加している。鹿児島では栽培面積微増。スワルスキーカブリダニに加え、コレマンアブラバチやミヤコカブリダニ等の天敵を利用したIPMへの取り組みが増加している。沖縄では定植期以降に3個の台風襲来による被害を受け、出荷開始の遅れ、生産量が平年に比べて激減した。また、栽培中盤以降の立枯れ(リゾクトニア)による生産量の減少傾向が続いている。対策として太陽熱処理展示圃を設けている。

早熟・普通栽培(熊本、大分、宮崎):熊本では、定植時期の天候に恵まれて生育は順調であったが、7月の豪雨と寡日照により生育後半は草勢が低下して、出荷量は減少した。一方、大分では生育に適した気温であったことから増収傾向であった。宮崎では、梅雨の曇雨天で落花が多く、着果の状態での腐敗果実も一部の圃場で見られたものの、天候回復とともに生育は回復した。病虫害としては、アザミウマおよびアブラムシの被害が認められ、他に大分では軟化腐敗病、うどんこ病、斑点細菌病が、宮崎では黒枯病、斑点病が発生した。

抑制栽培(沖縄):産地では8月～10月中旬にかけての5個の台風襲来による影響を受けており、特に10月中旬の台風襲来では露地トンネル栽培は壊滅的被害を受け、また、施設栽培でも株の被害程度が大きく、大半の圃場で植替を余儀なくされた。一部、被害枝の切り戻し剪定により継続栽培を行っている農家もみられるが、11・12月の年内出荷量は大幅に減少した。

5)キュウリ

品種動向:同じ作型であっても、県、さらに産地により多様な品種が栽培されている。褐斑病抵抗性品種の導入が進んできた。促成栽培用品種としては、「極光 607」、「ハイグリーン」、「輝世紀」、「エクセレント節成1号」、「エクセレント353」、ステータス系、アルファ系など。早熟・普通栽培では、「ちなつ」、「極光 607」、「ステータス夏」、「ビュースター」、「南極 1号」が、抑制栽培では「ズバリ 163」、「エクセレント 353」、「極光

607]、「ちなつ」、アルファ系やステータス系(熊本)、「ビュースター」、「Vアーチ」が、それぞれ利用されている。沖縄では、促成から抑制作型まで「輝世紀」および「エクセレント 353」が主要品種。

促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄)：[23 年定植]1・2 月の低温・寡日照のため生育がやや抑制され、佐賀、鹿児島では収量が低下した。福岡、長崎、熊本、沖縄ではほぼ平年並みの作柄であった。[24 年定植]定植後の 11・12 月の低温の影響で、宮崎では果実肥大が遅れ、収量は低下している。福岡、熊本は平年並み。佐賀では二酸化炭素発生装置の導入が進められている。

早熟・普通栽培(福岡、熊本、鹿児島、沖縄)：鹿児島及び沖縄ではほぼ平年並みの作柄であったが、福岡及び熊本では、7 月の豪雨災害の被害ならびに寡日照による草勢の低下があり、出荷量は減少した。

抑制作栽培(福岡、佐賀、熊本、宮崎、沖縄)：宮崎では梅雨時期の曇雨天による草勢低下で収量の伸び悩みとともに、べと病、褐斑病被害が認められた。11・12 月の低温の影響が認められ、佐賀では収量減になったが、福岡、熊本では平年並みに持ち直した。沖縄では立ち枯れが多く発生した。

キュウリ退緑黄化病や黄化えそ病被害を軽減するため、媒介昆虫であるコナジラミやアザミウマの防除対策(天敵スワルスキーカブリダニの導入、0.4mm 目合いの防虫ネット展張、UV カットフィルムの展張等)が各作型、全地域において進められているものの、これら微小害虫の根絶は難しく、キュウリ退緑黄化病や黄化えそ病の発生が常態化している。

6) スイカ

品種動向：促成・半促成および抑制作型用の大玉主要品種は、「春のだんらん」、「祭りばやし 777」、小玉は「マダーボール」、「ひとりじめ 7」。早熟・普通作型用の品種は、熊本では「祭りばやし 777」、「ひとりじめ 7」、鹿児島では「夏太鼓」、「縞無双 H」、沖縄では「朝ひかり SR」、「富士光 TR」。長崎で、小玉スイカの作付面積が微増のほかは大きな動きはない。

促成栽培(熊本、鹿児島、沖縄)・半促成栽培(長崎)：[23 年定植]熊本は 2・3 月の低温・寡日照によりやや花質悪く 2 週間ほど交配遅れが生じ、前半は小玉傾向、後半は回復した。鹿児島では梅雨が長引き、生育はやや弱く、作柄は平年に比べやや劣った。沖縄では低温・寡日照による小玉化、白種化が多く発生した。[24 年定植]熊本のスイカは順調に成育。沖縄では、低温寡日照により小玉化傾向がみられ、また、ミナミキイロアザミウマが媒介する灰白色斑紋ウイルスと菌核病が多発している。

早熟・普通栽培(鹿児島、沖縄)・抑制作栽培(熊本、沖縄)：鹿児島での早熟・普通作型における作柄は平年並みであった。熊本の抑制作栽培では、定植時期の天候には恵まれ活着良好であったが、11 月上旬頃から低温が続き、出荷がやや減少した。

7) メロン

品種動向：「アンデス」、「クインシー」、「肥後グリーン」、「アールス雅」系、「アールスセイヌ」系、「ベネチア」系、「ユウカ」等の多様な品種が、産地・作型毎に展開している。品種の変動はほとんどない。

促成・半促成栽培(熊本、宮崎、鹿児島)：[23 年定植]熊本では、定植時期は天候に恵まれ活着良好だったが、2 月上旬から 3 月上旬の低温や日照不足で交配期に着果不良となり、2 週間程度の遅れとなった。前半は小玉傾向、後半は回復した。沖縄でも日照不足と低温の影響により、玉肥大の鈍化・着果不良・果実の劣化等がみられた。[24 年定植]宮崎では、臭化メチルの撤廃により、栽培面積が大きく減少した。

抑制作栽培(熊本)：定植時期は天候に恵まれ活着良好。11 月上旬頃から低温が続き、やや生育は遅れたがほぼ平年並み。退緑黄化病、つる割病、またコナジラミ、アザミウマの被害が発生しており、熊本では、病虫害対策として、0.4mm 目合いの防虫ネットの導入が進められている。

8) カボチャ

品種動向：品種は、「えびす」、「くりゆたか」、「くりほまれ」のほか、「宮崎早生 1 号」、「ニュー黒皮」、「九重栗」など。また、熊本では「坊ちゃん」や「プッチーニ」も。

促成・半促成栽培(佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄)：[23 年定植]熊本では、2 月上旬から 3 月上旬の低温や日照不足で交配期がやや遅れたが、その後は順調であった。鹿児島は平年並みであった。沖縄では、2 月までは平年を大きく下回る寡日照条件となり、収量減。また、23 年 12 月は長雨が続き、茎葉折損や病害が多く発生し、小玉果、未熟果が例年に比べて多く発生した。防風垣設置。

早熟栽培(鹿児島): 2月の寡日照により初期生育の遅延が認められたが、その後回復し、作柄は平年並み。

抑制裁培(長崎、熊本、宮崎、鹿児島): 長崎では、強風により茎葉が損傷した影響で小玉傾向となり、収量も不安定化した。なお、抑制裁培での取り組みは増加傾向にある。熊本では11月の低温の影響がみられたが、ほぼ平年並みであった。一方、鹿児島の本土地域については、着果、果実肥大ともに良好で、作柄は平年並み以上。しかし奄美地域については、度重なる台風の影響で、作柄は不良であった。

いずれの作型、産地においても、うどんこ病が広く蔓延。白斑病、疫病、アザミウマ、アブラムシによる被害が認められた。鹿児島では、モザイク病(アブラムシ防除)対策として、タフベル被覆による物理的防除と障壁作物(ソルゴー)を利用。

9)ニガウリ

品種動向:「えらぶ」(長崎、熊本、鹿児島)のほか、宮崎では「宮崎つやみどり」、「佐土原3号」、鹿児島では「か交5号」、「チャンピオン」が栽培されている。沖縄では、「汐風」(抑制、促成、半促成)、「群星」、「夏盛」(早熟・普通:施設)、「島風」(早熟・露地:露地)。品種の変動は小さい。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄): [23年定植]長崎、熊本の作柄は平年並み、鹿児島は天候に恵まれ数量増加した。沖縄では2月にかけて平年値を大幅に下回る日照不足と低温により、低い反収となった。低温時の着果安定対策技術確立が必要。

早熟・普通栽培(熊本、鹿児島、沖縄): 熊本では平年並みであったが、鹿児島では面積減少と梅雨の長雨により収量は低下した。沖縄では、露地、平張り施設、耐候性ネットハウス、H鋼ハウスでの栽培が中心である。8月の台風襲来による被害で全体収量は平年に比べ減収となった。

抑制裁培(熊本、鹿児島、沖縄): 各地ともに、生育順調であり平年並みの収量であった。沖縄ではH鋼ハウスと耐候性ハウス栽培が中心であり、約4ヶ月程度の短期栽培を前提に行っている農家が多い。

うどんこ病、アザミウマ、アブラムシ、センチュウ被害が認められる。熊本でつる割病が発生しており、新土佐台木を導入。

10)サヤインゲン

品種動向:「ベストクロープキセラ」、「ビックリジャンボ」のほか、「サーベル」、「ステイヤー」等。なお、沖縄では、半つる性「ケンタッキーブルー」を中心に栽培されており、わい性インゲン(「サーベル」、「キセラ」)では長期収穫に取り組む農家が増えてきている。生産者は増加傾向にある。

促成栽培(熊本、鹿児島、沖縄): [23年播種]沖縄では、23年11月の高温による着莢不良、さらに2・3月の長期の日照不足による影響をうけ平年に比べ減収となった。熊本、鹿児島の作柄はほぼ平年並みであった。[24年播種]熊本の作柄は平年並みであった。

早熟・普通栽培(鹿児島)・抑制裁培(長崎、鹿児島): 長崎の抑制では、8月下旬から播種が始まったものの、高温により発芽不良が発生したため、播き直しされた。その後、気温低下と共に生育は回復し、平年並み。鹿児島はいずれの作型も平年並みであった。

アザミウマ、ヨトウガの発生が多く、その他病虫害として、うどんこ病、菌核病、ハダニ、チャノホコリダニ等が認められた。鹿児島のハウス栽培ではスワルスキーカブリダニが導入されている。

11)ソラマメ

品種動向: 主要品種は、「陵西一寸」、「ハウス陵西」、「さくら一寸」、「唐比の春」。

夏まき栽培(鹿児島): 平年より気温の低下が早かったため、生育初期から草勢が強くなり、下節位は曲がり莢が多く、2月までの収量が平年より1割程度少なかった。褐紋病、褐斑病、さび病やアザミウマが発生。

秋まき栽培(熊本、鹿児島): 平年より気温の低下が早かったため、生育が遅く、収穫開始も平年より10日程度遅れる見込み。

12)エンドウ

品種動向: 夏まき用の「美笹」、「ミナミグリーン」、「サツマグリーン」、秋まき用の「ニムラサラダスナップ」、「ニムラ赤花2号」、「さつま白花」、「あくねグリーン」、「スーパーグリーン」、「南海緑」等で、動きはない。

夏まき栽培(鹿児島): スナップエンドウとキヌサヤエンドウは平年並みの収量。実エンドウは平年より気温

の低下が早かったため、生育が遅く、収穫開始も平年より 10 日程度遅れる見込み。収量は平年並み。

秋まき栽培(長崎、熊本、鹿児島):長崎では、離島、県北地域等でスナップエンドウの産地化が行われている。強風の影響により収量はやや低下したが、ハウス、露地栽培で定着。熊本ではほぼ順調な生育。鹿児島における実エンドウは平年より気温の低下が早かったため生育が遅く、収穫開始も平年より 10 日程度遅れる。収量は平年並みの見込み。

病虫害は、うどんこ病、褐紋病、褐斑病、ハモグリバエの被害が認められた。

13) オクラ(熊本、鹿児島、沖縄)

品種動向:主要品種は、「ブルースカイ(G、Z)」、「ニュースカイ」、「フィンガーファイブ」、「ガリバー」他。

半促成栽培(鹿児島、沖縄):[23年播種]鹿児島では、6月の曇雨天でいぼ果や曲がり果が多く、平年より 10%程度減収した。沖縄石垣島では、1~2月播種の作型で、生育初期の立ち枯れ(リゾクトニア、ピシウム)や花落ちもみられたものの、品質は良好であった。本島地区では 2~3月の播種において低温による発芽不良や排水不良圃場での立ち枯れが多くみられ、播き直した圃場が多かった。沖縄全域において、8月5日の台風接近時に多くの農家が切り戻し更新を図ったが、更新株の収穫開始期となる9月15日に再び台風が襲来し、株全体に被害を受けたことから、多くの圃場で栽培を終了した。

早熟・普通栽培(熊本、鹿児島、沖縄)・抑制(沖縄):熊本・鹿児島の早熟・普通栽培では、梅雨時期の豪雨、寡日照のため生育後半は草勢が低下し、減収した。沖縄石垣島の抑制栽培では、収穫開始期頃にあたる 10月中旬の台風襲来による被害で減収となった。

3. 葉根菜類

1) アスパラガス

品種動向:主要品種は、「ウエルカム」。品種の動きはない。

半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本):佐賀、長崎では、春の低温の影響で春芽の萌芽が遅れた。福岡では7月の北部豪雨で多くの圃場が浸水し被害を受けたものの、収穫量は平年並みであった。長崎、熊本では、梅雨、豪雨の影響で減収傾向であった。茎枯れ病が広がる気配を見せている。その他、斑点性病害(斑点病・褐斑病)、アザミウマ、ヨトウガがみられ、福岡では複合交信かく乱剤の利用が図られている。なお、佐賀では、夏季の高温対策として、寒冷紗被覆を推進。

2) ネギ

(1) コネギ

品種動向:産地、季節に応じて使い分けて周年栽培。北部九州では「FDH」、「冬彦」、「ストレート」、「若殿」、沖縄では「黒泉夏用」、「ジャワ」が主である。福岡では「冬彦」が伸びている。大分では梅雨時の耐倒伏性品種が導入。

春まき栽培(福岡、佐賀、大分、沖縄):福岡では春先の寒波により出荷量はやや減少したものの、大分では平年を上回った。沖縄では平年並みであった。

夏まき栽培(福岡、佐賀、大分、沖縄):北部豪雨、その後の高温により品質の低下がみられた。大分での収量は平年を上回った。沖縄では平年並みであった。

秋まき栽培(大分、沖縄):大分では播種量を多めにしたことに加え、生育も順調で、出荷量は伸びた。沖縄では平年並みであった。

冬まき栽培(大分、沖縄):大分での作柄は平年並み。沖縄では平年並みであった。

ネギハモグリバエ、アザミウマ、また根腐萎凋病の発生が認められた。虫害抑制のため、UV カットフィルムの導入拡大。

(2) ネギ

品種動向:主要品種は、夏・秋まきでは「羽緑」、「龍まさり」、「長悦」、「春扇」他を、春まきでは、「夏扇 4号」、「龍翔」、「関羽」等、産地・作型に応じて使い分け。

23年夏まき栽培(大分、鹿児島):鹿児島では生育順調。

23年秋まき栽培(大分、鹿児島):大分では春先の低温により生育停滞し出荷が遅れたものの、収量は平

年並みであった。

24年春まき栽培(大分、鹿児島):大分では春先の低温で生育が遅れ出荷量減少した。さらに、梅雨と豪雨の影響で出荷は大きく減少した。鹿児島では平年並みを維持。小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、ハスモンヨトウが認められた。

3)タマネギ

品種動向:早出し用として、「貴錦」、「レクスター1号」、「スパート」、「浜育」、「浜笑」、普通用として「ターザン」、「もみじ3号」、「七宝7号」、「浜笑」他が、作型に合わせて栽培されている。沖縄では「F1037」が主だが、代替品種を模索。

秋まき(早出し)栽培(佐賀、長崎、熊本、沖縄):長崎では育苗期から定植時期の高温多雨、年末からの低温・乾燥により初期生育は遅延傾向で推移し、小玉傾向となり収量が低かった。熊本は順調で、平年並み。沖縄ではセット球の植付けが9月より開始。作付面積の大きい宮古島では、べたがけの普及による台風被害の大幅軽減、大型トンネルの普及による長雨時の腐敗果減少、さらに、気象条件にも恵まれ、玉肥大はよく、12月より収穫始まった。沖縄県全体では増収傾向で品質も良好。佐賀では極早生から早生の作付面積増加。

秋まき(普通)栽培(佐賀、熊本、鹿児島、沖縄):佐賀では、年内の低温により生育遅れがみられた。熊本、鹿児島では平年並み。沖縄ではセット球定植は10月10日前後、苗定植は11月上中旬。べたがけ、雨よけ栽培の普及で品質、収量は良好であった。鹿児島において作付面積増加傾向。

病虫害として、べと病、ボトリチス葉枯れ病、アザミウマの発生が認められた。なお、佐賀では、圃場の排水対策推進とともに、つり玉の省力化のための米倉庫を利用した除湿乾燥・冷蔵貯蔵が増加。

4)ニラ(大分)

主要品種は「タフボーイ」、「スーパーグリーンベルト」。半促成(春まき冬どり)では低温伸長性の、普通(冬春まき夏どり)では葉先の強い品種をそれぞれ模索中。

半促成栽培での作柄は良好であったが、単価は低かった。白斑葉枯病、さび病がみられた。普通栽培での出荷量は昨年より若干多く、平年並みに回復した。夏場に品質低下が認められた。葉先枯れ生理障害、アザミウマが発生した。

5)レタス

品種動向:秋まき用として「アストラル」、「ステディ」、「マリーナ」、「シルル」、沖縄では秋まき・春まき用に「ラプトル」、冬まき用に「グリーンストーン」他、多数の品種が栽培される。

冬まき・春まき栽培(沖縄):それぞれ生育は概ね順調であった。

秋まき栽培(長崎、熊本、沖縄):10月からの出荷となる長崎での年内どりでは、9月~10月の乾燥の影響を受けたが、10月中旬以降適度な降雨により生育は回復。熊本では、11月と1・2月の低温の影響による生育の遅れがみられたが、その後回復し、順調に推移した。沖縄では台風の影響で定植が1ヶ月遅れ、生産量減少。

病虫害は菌核病、軟腐病、ヨトウガ等の夜蛾被害が認められ、また沖縄では特に冬まき栽培においてタイワンシロガシラの被害が大きく、防鳥ネット対策が講じられている。

6)ホウレンソウ(佐賀、熊本、鹿児島、沖縄)

秋・冬まき用として「トラッド」、「トラッド7」、「ハンター」、「パレード」、「サラダ」、「エースセブン」、春・夏まき用として「ブリウス」、「トリトン」、「アクティブ」、「アトラス」、「ニュー進太郎」、「躍太郎」、「パレード」他、産地、作型によりきわめて多数の品種が栽培される。

いずれの産地、作型においてもほぼ順調な生育であった。ヨトウムシ、ケナガコナダニ、べと病が発生。

7)コマツナ(鹿児島、沖縄)

鹿児島における春・夏まき栽培用として、「菜々美」、「わかな」、「黒わかな」、秋・冬まき栽培用として「わかな」、「SC8-007」が栽培される。沖縄では作型を問わず「はっけい」。

いずれの産地、作型においても生育は順調で、平年並みの収量であった。ヨトウガ、キスジノミハムシの発生が認められるため、微細な目の防虫ネットが利用される。

8)ハクサイ(長崎、熊本、鹿児島)

品種動向:夏まき・秋まき栽培では、「晴黄 90」、「晴黄 85」、「黄ごころ」、「きらぼし」、「春到来」、「春物語」、鹿児島での冬まき栽培では「菊錦」、「黄楽」等が栽培される。長崎、鹿児島では品種変動はやや早い。

夏・秋まき栽培では、各地とも作柄はそれぞれほぼ順調であった。べと病、白斑病による被害が長崎で認められ、鹿児島では桜島からの降灰の影響を受けた。鹿児島の冬春まき栽培では低温による抽台恐れがある。菌核病、べと病がみられる。

9)キャベツ(佐賀、熊本、鹿児島、沖縄)

品種動向:夏まき栽培では「彩里」、「三国」、「金春」、「夢舞台」、秋まき・冬まき栽培では「おきな」、「彩ひかり」、「寒玉 6 号」、「T-532」等が栽培される。鹿児島の夏まきで、寒玉系品種が増加傾向。沖縄では作型を問わず「はやどり」。

各県、各作型ともに、作柄はほぼ順調であった。沖縄では秋まき栽培の作付面積が増えている。また、佐賀で契約栽培の取り組み増加。軟腐病、根こぶ病、コナガのほか、特に沖縄で菌核病の被害がみられた。

10)ブロッコリー

品種動向:夏まき栽培用として「ピクセル」が広く利用され、他に「グランドーム」、「しき緑 96 号」が、秋まきでは「彩麟」、「エンデバー」、「おはよう」、「幸よし」。冬・春まきでは、「ピクセル」、「彩麟」が栽培される。

夏まき栽培(福岡、長崎、熊本):福岡では 11 月下旬以降の低温で出荷遅れた。長崎、鹿児島は順調。長崎での作付面積は伸びており、個別の経営規模も拡大中。また、氷詰め等による鮮度保持も進んできた。鹿児島では桜島からの降灰の影響を受けた。根こぶ病、黒腐病、コナガの発生が認められた。

秋まき栽培(福岡、鹿児島)・冬春まき(福岡、佐賀):各地、順調な生育で平年並み。佐賀では、水田裏作として作付け推進。

11)ダイコン(長崎、熊本、鹿児島)

品種動向:夏まき栽培用として「夏もどり」、「夏つかさ」、「夏天下」、「干し理想」、秋まき用として、「福誉」、「役者大門」、「秋月」、「秋神楽」、「梅風」等。鹿児島では、冬まきには「つや風」、「YR 鉄人」が、また春まきには「春いずみ」、「作得」が栽培される。全体に、品種の動きはやや速い。

秋の低温による生育遅延が認められたものの、各地、各作型ともに概ね順調な生育であった。熊本において梅雨の長雨による播種作業ができない時期があった。長崎の夏まき栽培では、JA による労力活用、業務用契約の推進の動きが見られ、作付面積が拡大している。病害では、菌核病、軟腐病、白斑病が発生。

12)ニンジン

品種動向:主要品種は「向陽2号」である。熊本の夏まき・秋まきでは、「ベータリッチ」や「愛紅」、長崎の秋まきでは「黒田五寸」、沖縄の秋まきでは「TE30」が用いられる。

夏まき栽培(熊本、鹿児島):生育良好で、ほぼ順調。

秋まき栽培(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):長崎では低温により収穫がやや遅延傾向となった。なお、収穫機の導入による省力化、土壌改良等による高品質生産の動きもある。沖縄では、台風 21 号による影響で蒔き直し圃場が多く、収穫始期が例年より遅れた。その他の産地では概ね順調であった。

13)ゴボウ

春まき栽培:鹿児島における品種は「柳川理想」。生育は順調。ヒョウタンゾウムシ対策としてトクチオン F 粒剤処理。

夏まき栽培:福岡では「渡辺早生」が用いられ、一部の産地で 8 月下旬～9 月上旬播種の発芽が高温、乾燥により不良となった。年末から収穫のものに短根のものが発生し、品質が劣った。年明け収穫もので短根が多発した。鹿児島では「山田早生」、「すなお白肌」、「直輝」が用いられ、生育は順調であった。なお、高温対策として、白黒ダブルマルチを利用。病虫害は、福岡ではカブラヤガ、鹿児島では黒あざ病が発生。

秋まき栽培:福岡では「渡辺早生」、「柳川理想」。9 月下旬播種では発芽が不良となった。また、降雨により 10 月下旬播きの播種が遅れたが、それ以降は播種が順調に行われた。12 月中旬からの低温により生育が遅れ、根の伸長や肥大が例年に比べ劣った。鹿児島では夏まきと同様の品種「山田早生」、「すなお白肌」、「直輝」が用いられ、生育は順調であった。病虫害として、福岡、鹿児島ともに黒あざ病が発生するため、

輪作、残渣の撤去、土壌消毒を実施。

冬まき栽培：鹿児島における品種は「柳川理想」、「常豊」。生育は順調で、面積は増加傾向にある。ヒョウタンゾウムシ対策としてトクチオンF粒剤処理。

14) バレイショ

品種は、「ニシユタカ」、「メークイン」、「デジマ」、「トヨシロ」、「アイユタカ」。「アイユタカ」が春作で微増。

春作(長崎、熊本、鹿児島)：長崎では、植え付け後の降雨が少なくマルチ被覆が2月上旬以降におくれ、そのため萌芽後に低温被害を受け、さらに、3月中旬の寒波により一部地域が霜害を受けた。4月以降は適度な降雨もあり生育は回復したが、肥大期の降雨量が少なく小玉傾向。熊本および鹿児島(離島)では、生育は順調であった。病害では、そうか病、青枯病、一部で疫病が、虫害としてはアブラムシが発生。

秋作(長崎、鹿児島、沖縄)：長崎では、9月上中旬植え付けは順調に進んだが、9月下旬から10月下旬に乾燥傾向で推移したため、生育はバラついた。10月下旬以降、適度な降雨により生育は回復傾向となったが、1週間程度の生育遅れとなり小玉傾向となった。台風被害がなかった鹿児島では生育順調であったが、沖縄では1月中旬の台風並みの強風により茎葉の枯損がみられ、収量は1割程度減少する見通し。

15) サツマイモ(熊本、大分、鹿児島)

高糖度品種「べにはるか」が各地で伸びている。他に、「ベニサツマ」、「ベニアズマ」、「高系14号」。鹿児島では半促成作型もある。それぞれほぼ平年並みで順調であった。

16) サトイモ(熊本、大分、鹿児島)

品種は、「石川早生(丸)」、「大吉」、「大和」ほか。早熟・普通作型。大雨、台風の被害も懸念されたが、順調に生育し、作柄は良好であった。大分では優良種芋の増殖及び普及に取り組んでいる。

(九州沖縄農業研究センター暖地野菜花き研究調整監 坂田好輝)